

優秀賞

『技術的複製可能性の時代の芸術作品』 ヴァルター・ベンヤミン著

文学研究科 博士後期課程 3年 清水勇樹

ミロのヴィーナス。その名は遠い日本においてもよく知られている。都内のオフィスビルにはよく美術品が飾ってあるが、ガラス張りのエントランスにヴィーナス像を置いた不動産会社を見たこともある。高級感の演出ではあろう。しかし、本物のヴィーナスがルーヴル美術館にあることも周知の事実であるから、不動産会社でヴィーナスを見る者はある種の違和感にも包まれる。「高級」な芸術作品がこうも一般化したのは、一体いつからか。

今からおよそ100年前、ドイツのユダヤ系思想家ベンヤミンもこのような問題と格闘していた。1935年の小論『技術的複製可能性の時代の芸術作品』は、その思考の痕跡である。かけがえのない一点ものとしての芸術作品が迎えた大きな転機を、ベンヤミンは写真・レコード・映画といった19世紀末以後の技術的複製に求める。これは手工的複製に比べ、本物と寸分違わぬ複製を可能とするのみならず、自然にはありえない形での加工・記録をも可能にした。これによって芸術作品が宿していた「いま、ここ」だけの一回性は永遠に失われる。技術が人間の時間感覚をも変えたのである。ベンヤミンは古代のヴィーナス像を例に挙げてこう説明する。ヴィーナスがギリシア人に礼拝されるにしろキリスト教徒に排斥されるにしろ、そこには自身の伝統を確認する意義があった。しかし技術的複製は「複製されるものを伝統の領域から解き放つ」。その代わり、芸術は時間の制約を逃れ、展示場所にも縛られず、また受け手の階級も人数も問わない劇的な広まりを見せるようになった。新たに芸術の担い手となった大衆は、かつてない気軽さで芸術を批評し、また芸術を産む側にもなった。ベンヤミンは芸術の「革命」たる技術的複製に、反ファシズムの気風をも読み取る。

「芸術」と「技術的複製」をテーマに政治・歴史・人間性を問い直す本作は、註釈を含め60ページほどの文章量ながら、論の密度に関しては10倍のページ数を読むような感がある。ベンヤミンが例示する幾多の芸術作品や複製の歴史を調べるだけでも、単純に好奇心を満足させてくれる一篇ではある。しかし、ただ「勉強になる」だけの本作ではない。過去を振り返ることで現状をどう認識し、どう生き抜くかをも問い直す姿勢がある。インターネットを通じた複製・共有が当然となった今日、ミロのヴィーナスも今や余りにありふれた高級美術品となっている。どのような芸術が「高尚」なのか、はたまた「低俗」なのか、作り手と受け手との絡み合いで、作品の価値は玉虫色に照り返る。無数の真実が並び立つ現代は、一人一人が何を「正しい」と判断するか、絶えず再考を迫られる時代でもある。ベンヤミンの言う伝統からの断絶は、現代においてはより深刻な問題といえよう。加速度的な変化を経験している我々であればこそ、今一度ベンヤミンの100年前を振り返ってみるといい。混迷の中を進む糸口を見つけられるはずだ。